

# [7] 32回転の誘惑 ～舞踊表現の虚偽と真実

1990年6月8日 東京新聞 夕刊

## ● グラン・フェツテ

クラシック・バレエのグラン・パ・ド・ドゥというのは、主役クラスの男女の踊り手が、はじめは組んでしつとりと踊り（アダージュ）、次いで一人ずつ（ヴァリアシオン）、最後にまた一緒にスビィディーに踊り納める（コーダ）、その形式の全体をさしている言葉で、ふつうは全幕を通して一つか二つ、物語がもつとも盛り上がる場所に置かれている。たとえば『白鳥の湖』なら、二幕の王子と白鳥オデット、三幕の王子と黒鳥オディールの二カ所である。

その黒鳥のグラン・パ・ド・ドゥのコーダで、バレリーナが三十二回のグラン・フェツテという動きをする。片足を軸にして、もう一方の足を下ろさず、水平方向に曲げ伸ばしする勢いで三十二回転するもので、これがバレエのテクニクでも一番難しいものということになっている。物語のうえからは、白鳥姫オデットに愛を誓った王子を誘惑する悪魔の娘オディールが、次第に魔性を顕わしてくるその表現ということにされているようだが、しかし自分でやってみた経験から言えば、あのグラン・フェツテというのはひたすら精神集中のみを必要とするもので、そこにたとえば男を誘惑するといった気分などは、抱いている余裕がない。また現実にも、ふつう人間の女は（そして多分、白鳥の雌も）男を誘惑するとき一本足でクルクル回ったりしないものだ。これこそは舞踊ならではの虚偽、ないしは誇張というべきものだろう。音楽に合わせて体だけを使って精神的なものを表現するとなれば、多少現実と違ってオーバーになるのはいたしかたない。

『ジゼル』的一幕で村娘のジゼルが、恋人のアルブレヒトが実は貴族で、しかも婚約者があることを知って、悲嘆のあまり死ぬと、母親のベルタは両膝を地につき、両手を高々と天にさしのべて激しく嘆く。『ロミオとジ

# [7] 32回転の誘惑 ～舞踊表現の虚偽と真実

1990年6月8日 東京新聞 夕刊

ユリエット』でも、ティボルトの死体を前にしてキャピユレット婦人が同じようなポーズをする。実を言うとこれなども、私はいささか舞踊的誇張だと思って見ていたのであった。精神的にはあの通りでも、実際に日常生活であのようなおおげさなポーズはしなないと思っていたのである。

## ● 誇張じゃなかった

ところがフランス留学中のこと、ある日街なかで犬が車に轢かれて死ぬところに出くわした。その死体をひしとかき抱いた飼い主の中年女性は、それから胸を反らせ両手を掲げて悲しみを天に訴えたのである。ベルタの、そしてキャピユレット婦人の姿そのまま、ああ、あれは真実あの通りだったのだと、私は深く胸に刻んだ。

それから後にも、親しくしていたスイスの女子学生の恋が悲惨な結末を迎えたとき、彼女は悲しみ怒って、たった一人の観客である私を前にして、その劇的なポーズをし、私はいささか肉体的な恐怖を覚えつつも、一方で、『ジゼル』は誇張ではなかった、これこそまさに身をもって知る文化の違いだと感じ入ったものである。

やはり日本人だから、西洋の身体表現であるバレエに關してはどうも理解の至らないところがある。そんなふうに私は考えていた。日本の舞踊ならもつとびったり、感覚的に分かるのではないだろうか、と。しかし、話はそんなに簡単ではなかった。

## ● 袖にされると実際に…

そののち日本舞踊に熱中することになって、長唄の『娘道成寺』を稽古していたときのことである。

「恋の手習 つひ見習ひて 誰に見せうとて 紅鉄漿(かね)つけよぞ…」に始まるクドキの部分。ここは恋に悩む女ごころの表現なので、お手のもの、と言いたいところ

## [7] 32回転の誘惑 ～舞踊表現の虚偽と真実

1990年6月8日 東京新聞 夕刊

ろだけれども、現代女性としては何やら歯がゆかったり、照れくさかったり…、しかしそこはまあ日本人だから分らないこともないように思われた。

「ふつつり恪気せまいぞと たしなんでみても 情なや」情感が一番盛りあがるところである。次の「女子（おなご）には 何がなる」では、両膝ついて、そこに立っているつもり男の袖に背後から取りすがり、振り払われる。また取りすがり、また振り払われる。問題はその振りはらわれるときの姿である。どうも納得がいかない。両手を回して倒れるのはなんだか大仰すぎるような気がする。思いあまって姉弟子に、袖を振り払われるとどんなふうになるのかしら、と聞いてみた。すると、

「分からないわヨ、わたし男に振られたことないもの」  
「！」

そこで今度は、試しに袖に縫らせてみてくれないかと頼んだところ、彼女はしぶしぶ立ちあがり、その袖に必死に取りすがった私を、情け容赦もなく振り払ったのだが…、しかし振り払われて、私は驚いた。それは本当に、おおむけに転倒せんばかりの衝撃だったのである。

人に冷たくされるとか、失恋するという意味で、現代でも「袖にされる」とか、「振られる」という言葉をよく使う。けれども、袖のある着物で日常生活を送っていない私たちは、それが実際にどういふことなのか、本当には分かっているのではないのである。ゆらゆらと揺れ動くものにすがりついて、自分の重みのありたけを預けたあげくに振りほどかれた、その天地が逆さまになるような無残な思い。私も人並みに失恋の経験はあるつもりでいたけれども、しかし、あんな思いは二度としたくないと、「袖にされた」感覚は舞踊的に、言いかえれば肉体的な知性を通して、私のなかにしっかりと刻みこまれたのだった。